

# 「共有」という概念について

岩 畑 貴 弘

## 1 はじめに

本研究では、日本語の終助詞「ね」に関する先行研究において多用されてきた「共有」という概念に焦点を当てて検討してみる。先行研究において本概念あるいは類似していると思われる概念は、互いの相関関係あるいは同じなのか違うのかなどを含め、あまり深く検討されることはなかった。しかしながら翻って考えてみると、「共有」とは、そもそもコミュニケーションをするための理由のひとつとも考えられるほど重要なものと言えるであろう。人間のコミュニケーションの目的として：

1. 相手のことを知り
2. 自分のことを述べ
3. 同じ意見を共有する

という大きな三種があると推察される。(この三種以外の目的をもちろん否定するものではない。) したがって、「3. 同じ意見を共有する」と関わる言語形式が存在してもまったく合理的なことである。

本論文では、「共有」という概念を今一度検討するところから始めた

い。その後、「共有」概念と深く関わっていると思われる日本語の終助詞「ね」を論じた後、英語・中国語における言語使用・言語形式にその概念がどのように関わっているのか、あるいは関わっていないのかを検討することにより、「共有」概念と、個別言語を超えたその普遍性について検討を加えたい。

## 2 日本語の終助詞「ね」と「共有」概念

日本語の終助詞「ね」の使用の根本には、どのような表現あるいは定義で用いようとも、「共有」的な概念が存在することは以前より指摘されてきた。メイナード（1993: 102-4）や北野（1993: 73-75）にその簡潔な紹介があるように、時枝（1951）、佐治（1956）、渡辺（1968）らによって早くから「ね」は「同調」の働きを持つと分析され、それ以降長きにわたって「同調」という概念・キーワードとともに説明されてきた。時枝（1951）は終助詞「ね」の使用を以下のように説明している。

「国語における一種の感動詞であるが、詞に付いて、それに対する感動を表現するというよりも、聞き手を同調者としての関係に置こうとする主格的立場の表現」（8 ページ）

しかし最近になり語用論・談話研究が盛んになって「ね」の研究がさらに進むにつれ、「同調」とは少し異なるように思われる概念で「ね」を説明しようとする研究が数多く現れた。例えば Cook（1988）は以下のように「ね」の用法を定義している。

「話し手と聞き手両者がお互いに賛同していることを示すが、その賛

意は特にとりたててある話の内容についての賛意であるとは限らず、概して賛同しているということである」(152 ページ)

ここでは、「概して賛同」というのがキーワードになると思われる。

また、最近は「情報」という概念に基づく研究も多いが、その潮流にそって「ね」を分析するものも多い。神尾(1990)では、以下のように「情報の同一性」がキーワードとなっている。

『「ね」の機能：「ね」は、現在の発話内容に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報が同一であることを示す必須の標識である。』(62 ページ)

大曾(1986)は以下のように「ね」を説明している。

「原則として話し手と聞き手の情報、判断の一致を前提とする」(93 ページ)

また、益岡(1991)は「情報」ではなく「知識」を用いて以下のように「ね」を説明している。

「話し手の知識と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合には「ね」が用いられ、、、」(96 ページ)

宮崎(1993)は「融合」や「共有」という表現を用いて以下のように「ね」の説明を試みている。

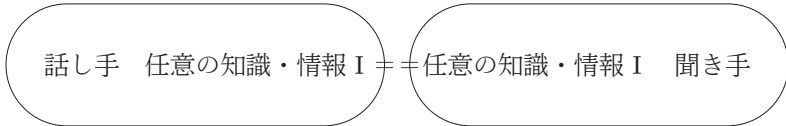
「ね…情報を融合領域において確認する。」(47 ページ)

「融合領域に属する情報とは『話し手と聞き手が無条件に共有できる情報』」(46 ページ)

このように「ね」の説明にあたって、「同調」「情報・知識の同一性」「共有」「融合」などのキーワードが使われてきたが、どれが正しいのか、あるいはこれらは本当に異なる概念であるのか当然疑問が湧く。

まず、「共有」と「同一」は同じものと考えてよいと思われる。まず「知識・情報」が「同一」であるということは、話し手 S と聞き手 H が、当該発話がなされる時において同一と呼んでよいと思われる知識・情報を保有しているということであろう。

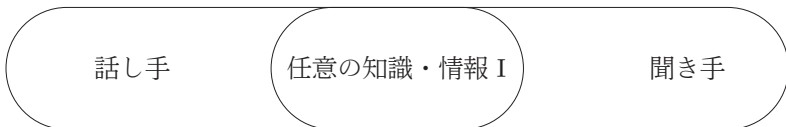
(1)



ということであろう。当然ながら任意の知識・情報が完全に同一であるとは思えず、またそれを知る手段もありえないことから、話し手が考えるところの、常識的な意味での同一性ということの意味するにすぎない。

一方、「共有」というならば、話し手と聞き手は、当該発話がなされる時において、ある知識・情報を共に所有しているということになろう。これは：

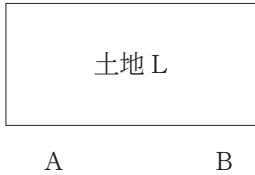
(2)



と図示できよう。

(1) と (2) は一見異なる状態のように見えるが、実は同じものをやや異なった方法で表わしているにすぎない。任意の知識・情報を、もう少し卑近な例で、かつ実態のあるもの—土地が「共有」されているという状態—で考えてみよう。

(3)

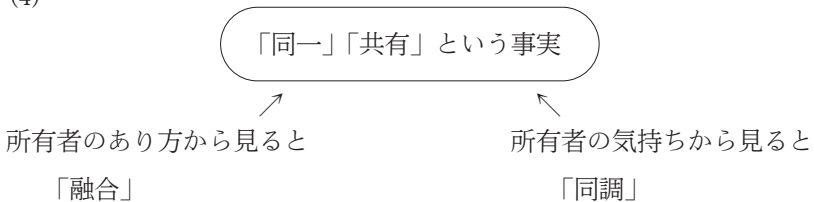


「土地LがAとBによって共有されている」=Aが持つ土地Aの所有権とBが持つ土地所有権は同一であるということの意味している。そしてAとBは土地を売却等しようと思えば、一枚の契約書にサインするなど、同一の行動をとらねばならない。

これを少しずれた側面から見てみよう。すると、それはある意味、AとBは土地Lとのかかわりにおいて、融合した存在とも言える。つまり、土地の所有状況を中心に見れば、「同一」「共有」であるが、所有者の状況を中心に見れば、「融合」といえる。

さらに言えば、「同調」つまり、この場合、「同一の土地を持っている」と互いが確認するというのは、もちろん「同一」「共有」が成り立っていて、そのうえで「同調」がなりたつということである。図に表わせば：

(4)



このように、「共有」「同一」「融合」「同調」というのは基本的には同じことを違う側面から描写したもののようである。それらの差異は、おそらくより大きなフレームワークとの関わりで決定されるものであり、ここではそこに立ち入らず、「共有」を持ってこの概念を代表させることにする。

日本語の終助詞との関わりで「共有」（ならびに類似概念）を語るときに検討しなくてはならないもうひとつの問題は、「共有」とは一体何を共有するのか、ということである。例えば：

(5) 今日はいい天気ですね。

ということであれば、「今日はいい天気である」という情報なり、知識なりが共有されていると話し手が認識していると考えられる。これは比較的分かりやすい。

しかし一方で、終助詞「ね」には以下のような使い方もある。

(6) それじゃ次回は上野の博物館に行こうね。

ここにおいて「共有」されていると見られるものは「次回は上野の動物園に行く」ということよりはむしろ「次回は上野の動物園に行こう」という話し手・聞き手の同一の行動そしてそうする合意が「共有」されている、あるいは「共有」しようと話し手は試みていると考えるのが自然であろう。以下の例：

(7) これおいしいから食べてね。

この例においても、話し手が聞き手と共有を試みているその内容は「おいしいから食べて」という提案・勧めることまでを含んでいる。これは情報・知識というより、話し手の気持ちを含んでおり、「ね」はそこまで含んで「共有」を示すものといえる。

このように考えると、広く指摘されている通り：

(8) \*すぐに帰ってこいね！

という命令文+「ね」が使えない理由というものはっきりとしてくる。つまり、命令文というのは話し手から聞き手への一方通行的な伝達形式であり、そのような話し手の意図と「共有」という考えは本来的に相容れないと自然に説明可能である。

### 3 「共有」概念と日本語の終助詞「ね」

ここであらためて述べるまでもないが、数多くの先行研究が示してきた通り「ね」には一見さまざまな用法がある。それを全て網羅するのは本論文の目的には必要ないし、何より紙面が足りないため、別の機会に譲る。以下に、「ね」の用法のうち3種類を挙げて検討する。

#### 3.1 同調の「ね」

多くの国語学者によって「同調のね」と呼ばれた、「ね」の典型例とも言えるのが以下のようなものである。

(9) A：いやぁ、今日は本当にいい天気ですね。

B：ええ、そうですね。

眼前に広がる青空のもとで、「今日はいい天気だ」という事実・情報は聞き手とももちろん「共有」されていると認識されていると推定される。そのため、それを明示するための標識として「ね」が使用されているという説明が可能である。

ここにおいては「共有」よりも「同調」のほうがよりよい。

(10) A：いやぁ、いい天気だなぁ。

B：うん、そうだね。

Aは独り言でなくてもこれを言う。AはBも同一の情報を持ち合わせていることがわかっているのだから「ね」を使わなくてはいけない感じもするが、実際に使わなくてもよい。これはつまり「同調」がこの発言の主眼ではないからと言える。

これはある意味典型的な「ね」の使用であり、特に説明に困ることはない。

### 3.2 自己確認の「ね」

「ね」の典型ともいえる上述の「同調のね」は、「共有」概念でなら説明に困ることはないわけであるが、比較的最近指摘された「自己確認のね」は一見「共有」(や「同調」などの同一概念)では説明ができない。

(11) A：今何時ですか。

B：ええと、7時ですね。

この例は近年の「ね」に関する議論においてとりわけ注目をあびてきた。



従前の「同調」を基調とした考え方では説明できないからである。つまり、Bが提供する「(現在の時間は) 7時である」という情報・知識は明らかにAにとっては新情報であり、「いい天気ですね」といった時にみられる「同調」とは一線を画すからである。(この例がもとになり、一連の「情報の一致」という考えが提出されている。本論文のテーマからは外れるため、詳細については触れない。詳しくは金水1993など参照。)

しかしこれも「共有」という考え方を少し広く解釈すれば十分に説明可能な例である。つまり、確かに発話時点で「7時である」という情報は字義通りには共有されていないが、「共有」されるべき・「共有」に値する情報と考えればつまり実際に「共有」される前の一步手前と考えればなんら問題ない。「共有」されているということが「ね」の用法のコアであるとするなら、派生的用法として先取りの「共有」状態を「ね」を付加して表わす、といえる。実際に上述の例と異なり、質問に対する答えでない場合には非常に「ね」が使いにくい。

(12) (店内に残っている客に対して店員がこう言う)

? すいませんが、閉店の時間ですね。

また、上述の「自己確認のね」には「ええと」のような「確認」をあらわすような間がないと使いにくいという特徴が指摘されてきたが、これも即座に回答するような状況、あるいはそのような情報である場合は、一方から他方へと伝達するという意図が強くなり、「共有」という意図がその分弱くなるからと考えられる。

(13) A: これ、いくらですか。

B：1000 円になります。

このように「共有」という考え方を中心にして、それを広く解釈すれば「自己確認のね」のような派生的用法も問題なく説明可能である。

### 3.3 拒否・拒絶のね

「拒否・拒絶のね」の用法とは次の例に見られる。

(14) A：こんなこともわからないの？

B：わからないね。

(蓮沼 1992)

この例においては、Bが「わからない」という情報は明らかに共有されていないが、それでも「ね」が用いられている。これは広い意味で共有されていることが前提の「ね」なのにあえてその要件を満たしていないのに「ね」をもちいるため、皮肉的ニュアンスが生じる例と思われる。いわば「ね」の根幹にあるものが「共有」概念であることを逆手にとった用法と言えるのではないか。

拒否・拒絶の「ね」のメカニズムはおいておくとしても、日本語においては「共有」概念がすくなくとも終助詞ネの説明においては有用であることは疑いがないように思われる。

## 4 「共有」概念とその普遍性

日本語の「ね」にあたる表現がないかということでよく引き合いに出されるのが英語である。まずは以下の例を見てみよう。

(15) A : It's a beautiful day today!

B : Yeah, it is!

It's a beautiful day today という知識・情報は明らかに A・B 共に共有されているしそれを当然認識していると思われるが、まったくそれを明示するものがないことから、日本語と同じような方法では表示しないようである。

それでは、英語には他に「ね」にあたるような表現は存在するのだろうか。即座に浮かぶのが you know という表現である。これは Schourup (1983) が談話小辞 (discourse particle) という観点から詳しく分析している。神尾 (1990) に簡潔な説明があるため、そこから抜粋してみる。Schourup は「コミュニケーションの成立」というのを以下のように規定した。

「…コミュニケーションの成立とは、発話の結果、話し手および聞き手の内的世界がその発話に関して同一の状態になることにある。」(61 ページ)

これを前提として Schourup は you know の機能を以下のように定義している。

「you know は、話し手がこの同一性に疑問を感じた時、現在発せられている発話の内容に関して、2つの私的世界 (=話し手と聞き手それぞれの内的世界。著者注) の状態が同一であるか否かをチェックする機能を持つ。」

(61 ページ、下線は本論文の筆者)

Schourup によるこの分析を正しいと見るならば、ここには明らかに「共有」概念との共通性が見てとれる。

しかし、もちろんまったく同一ではない。実際に上述の「ね」の例と同様のコンテキストで英語に訳してみればそのまま you know に訳せない事実からも明らかである。

(16) A : How much is this?

B : \*Twelve dollars, you know.

(17) A : Why don't you visit your sister and help her?

B : \*I never want to do that, you know.

上述の例は日本語における「ね」が使われているものをほぼ訳したものであるが、明らかにおかしい。

それでは、日本語の「ね」と英語の you know はどこが違うのか。これまでの先行研究・およびここで取り上げた例・そして上述した「共有」概念との関わりからまとめると以下ようになるであろう。

(18) 日本語の「ね」：情報が「共有」されている。そうではない場合も存在するが、それはその前提を逆手にとった皮肉的用法である。

(19) 英語の you know : 情報が共有されつつあるプロセスの途上においてそれをチェックしている。大抵の場合は結果として「共有」されていると言えるが、you know の使用はそれを前提とはしていない。

このように、日本語の「ね」と英語の you know は同様の概念を使用

しているように思えるが、その用い方が異なるために対応しない表現となっていると思われる。

ここまで日本語と英語の例を見たが、その他の言語ではどうなのか当然興味が湧いてくる。広く知られているとおり、台湾ではその地域の言葉である台湾語に加えて、標準中国語も国語としてほとんどの人に日常的に使われている。それはいわゆる我々が知るところの中国語と基本的に同じであるが、台湾語その他の影響が多少見られることも事実である。その中に、「啊」という文末助詞がある。

(20) A：今天天氣很好啊。(今日は天気がいいね。)

B：對、很好啊。(うん、そうだね。)

(21) A：你能來嗎？(あなた、来られる？)

B：能啊。(来られるね。)

このような例を見ると、日本語の「ね」と通じるものを感じるのは確かである。実際、啊は「友人同士の会話に多用され、かしこまった会話には使いにくい」「啊を付加すると、話し手と聞き手の距離が近くなるような感じがある」という母語話者の一般的感想が得られる。

しかしながら、細かく見ていくと「啊」は「ね」と大きく異なる使用が見られる。

(22) 你下午要去買什麼啊？(あなた、午後何を買いにいくつもりなの？)

この例においては聞き手に対する純粋な質問であり、日本語においては

そのような場合は「ね」が非常に使いにくい。（\*あなた、午後何を買  
いにいくつもりなのね？）一方の中国語では「啊」が何の問題もなく使  
用可能である。

このようなことを考えるとき、中国語の「啊」という文末助詞は日本  
語のように「共有」であることを示すマーカーでないのは確かであろう  
し、また you know とも異なって、「共有」を促しているわけでもない  
ようである。しかし一方で、母語話者の感想にあるように、「親しみ」  
などがキーワードとして認識されており、「ね」や you know との共通  
点も多い。主に台湾で多用される「啊」がなんらかの意味で「共有」概  
念をもとにした文末助詞であるか、あるいは中国語において「共有」概  
念をもとにした他の言語形式や語があるかどうかは今後の研究の目標の  
ひとつとしたい。

## 5 おわりに

本論文では、日本語の「ね」の分析において用いられる「共有」「同  
調」あるいは類似の概念について検討を加えた。結果として、そのよう  
な概念は基本的に同じことを別の角度から見たものであり、どのような  
用語を用いるかということはその分析が立脚する理論にもよるため、あ  
まり厳密に取りざたすることは意味がないことを見た。また、そのよう  
な「共有」概念は我々のコミュニケーションと密接に関わっており、広  
く言語形式と関わっていることが予測されるが、その例として日本語の  
「ね」や英語の you know とのかかわりをみた。中国語の「啊」という  
文末助詞もこの観点から検討を加えたが、これに関しての結論は持ち越  
しとしたい。

## 参考文献

- 大曾恵美子 (1986) 「誤用分析 1 『今日はいいい天気ですね。』— 『はい、そうです。』」『日本語学』第 5 卷 9 号、91-94。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』、東京：大修館書店。
- 北野浩章 (1993) 「日本語の終助詞『ね』の持つ基本的な機能について」『言語学研究』第 12 号、73-88。
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22 号 4 卷、118-121。
- 佐治圭三 (1956) 「終助詞の機能」『国語国文』26 号 7 卷、23-31。
- 時枝誠記 (1951) 「対人関係を構成する助詞・助動詞」『国語国文』20 号 9 卷、1-10。
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版。
- 宮崎和人 (1993) 「『～ダロウ』の談話機能について」『国語学』175 号、40-53。
- メイナード・泉子 (1993) 『日英語対照研究シリーズ (2) 会話分析』、東京：くろしお出版。
- 渡辺実 (1968) 「終助詞の文法論的意味」『国語学』72 号、127-135。
- Cook, Haruko Minegishi (1988) Authority for Knowledge: Sentential Particles in Japanese Conversation: A Study of Indexicality. Unpublished Dissertation. University of Southern California.
- Schourup, Lawrence C. (1983) Common Discourse Particles in English Conversation, Ph. D. Dissertation, The Ohio State University.